

(卷月五年三十二第)

「統

(號一十九百二第)

一

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木

直に御聯想下され候儀に候

京都 草木

三條通烏丸東入ル町

念珠各種
御念珠

念珠ならば小野嘉助店へ
顯日蓮宗各本山御用達
法華宗妙満寺御用達

弊店の特色は實用を旨とし從來
命願仕候へば多少に不拘御用

京都市寺町通蛸薬師下ル

電話中二二六〇八番

眼

藥

效能、たゞれ目、かすみ
目、ほし目、くもり目、
ち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラボ
ーム等

田布
眼
藥
定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八十
錢、壹圓、

田布
眼
藥
定價壹袋、拾錢、貳拾錢
田産後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣
絶、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、

千葉縣山武郡源村上布田參百番地
藥王寺

田布
眼
藥
本舖
齊藤日章

(御注文は總へて下記振替に)

(振替東京第六七九一番)

佛像佛具
位牌木鉢

調度所

宮殿幢天蓋

其一式

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

小賣部 京都三條小橋東入南側

振替口座東京二四五六八番

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂佛具陳列場

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

小賣部 京都三條通小橋西入

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

三法堂 藤田總治

長距離電話中貳七八參番

振替口座大阪四貳〇五九壹

郵稅四錢

定價表ハ御一報

次第送呈可仕候

●御用仰せ被下候はゞ可呼深切を旨と致候●

卸部 本舖

統一誌廣告

●「統一」誌も紙が少し廉くなつたと喜んで居たら、本月から又々活版部の方から手間賃の方の値上げをして来て、結果的に就て幾らかの印刷費が高くなつて全部では餘程拂ひが嵩むことになつた。こんな様子では多少本誌代價の値上げをすかも知れぬ。

●「集金郵便」(振替口座)を差出します以前には必ず葉書にて御一報申しあげることに致して居ますから、成るべく御用意の上御絶えなき様御依申します。

又初めての讀者の中には集金郵便を異様にお感じになる方もある様ですが、集金郵便は相方の手數をはぶく最も便利な文用たく悪からず御諒解下さい。

日蓮聖訓要義

全部拾貳卷
各四六版總クロース
百頁頃美本約三

第一卷(既刊)

(一)緒言。(二)法華大綱鈔。(三)法華鈔。(四)法華取要鈔。(五)如說修行鈔

本多日生猊下著述

定價各金壹圓五拾錢、郵稅内地十二錢滿鮮廿四錢

勇猛精進

一 倫理思想の調節

今夜は氣候の關係で演説を聽いて居ると睡たいやうであります、太變に良いお話を段々あつて理に詰んだことでありましたから、大部あたまがしつかりして居らぬと、分らぬやうな風になつて行きます、又私が佛教の意味を加へて、この問題をお話すると面倒になりますから、成べく餘り面倒にならぬやうに、サツとお話しやうと思ひます。

倫理上の事もやはり調節と云ふことは非常に大事なことで、私は西洋の思想は大部分偏傾する質を帶びるものであると思ふのであります。東洋の倫理思想は概して調節と云ふことに重きを置いて居るので、御承知の通りに論語にも、「君子の道は中庸に於てす、小人の道は中庸に反す」と云ふので、即ち偏傾と云ふこと、三角あんまと云ふことは、小人の道ナンであります。東洋人は思想が漠然として居るやうであるけれども、その漠然たる所によつて、小人の道は中庸に反す」と云ふのである。

倫理上の事もやはり調節と云ふことは非常に大事なことで、私は西洋の思想は大部分偏傾する質を帶びるものであると思ふのであります。東洋の倫理思想は概して調節と云ふことに重きを置いて居るので、御承知の通りに論語にも、「君子の道は中庸に於てす、小人の道は中庸に反す」と云ふのである。

倫理上の事もやはり調節と云ふことは非常に大事なことで、私は西洋の思想は大部分偏傾する質を帶びるものであると思ふのであります。東洋人は思想が漠然として居るやうであるけれども、その漠然たる所によつて、小人の道は中庸に反す」と云ふのである。

君の道は聞然として日に章かなり、小人の道は聞然と云ふのは、ぼんやりして居るやうな、聞いやうな意味であるけれども、歲月を経ると共に、道は漸く適切にして、如何にも尤のやうであるけれども、歲月を経ると共に亡びてしまう、一時の事であると云つて居る。私は飽までもさう云ふ思想を信するものである。この倫理の問題もやはり中庸に言つて居るが如く、

大徳は教化し小徳は川流す。又佛法の方で言へば、「曰く言ひ難し」と云ふやうな意味に現はれて来る。浩然の氣は曰く言ひ難きなり。(孟子)この法は妙にして思議すべからず。この法は妙にして思議すべからず。

本多日生

這是曾て日本會計協會清明會聯合第二回例會として帝國鐵道協會に於て講演せられたる速記なり。

第二卷(既刊) (六)立正安國論。(七)開目鈔

第三卷 開目鈔全部

本多聖語錄

定價貳圓貳拾錢、送料拾貳錢滿鮮廿錢

本多開目鈔詳解

定價貳圓。送料拾貳錢。滿鮮廿錢

本多日生猊下新著

定價壹圓八拾錢。送料拾貳錢。滿鮮廿錢

東洋文明の權威

二頁 四六版三百五十

多本日生

定價壹圓八拾錢。送料拾貳錢。滿鮮廿錢

多本日生

定價壹圓六拾錢。送料拾貳錢。滿鮮廿錢

法華經の意味を解り易く知りたい、是れ皆我日蓮門下の慾求するところであります。能仁事一師は通俗講話の大家として夙に其名を知られて居る人であります。が、今回法華經八卷に就て分り易く講義をなされまして新に美装して出版しまし。た。文字は總振り假名つきです、早く法華經の全體が知りたいと思はる、方はスグ御注文下さい。

右各書冊取次 東京小石川區白山前町一七 振替口座東京三三五三番 統一編輯所

後藤新平論 美本函入定價貳圓拾貳錢滿鮮廿錢

山口菜花著

未來の首相? 今歐米に悠遊せり、彼れ今何を其胸に藏しつゝありや、風雲暗憺たり、疑問の怪雄に對する菜花野人が筆鋒夫れ何を論ぜるや。

右發行所 統一編輯所

不可解とか、分らぬと云ふやうな绝望的のものでなくして、頗る湯仰を意味して居る、其處に光を認めるけれども幽遠にして至り難きものであります。門が閉つて居つて見えないのではない、門は開いて居るけれども奥行が深く、幽遠にしてその奥を究め難きものであると云ふ、湯仰を有つて居るもののが妙法である。「妙」は不可解なりと云ふやうなことを直き言ふけれども、門が閉つて何を見えないで久伸して居るのと、門の奥が如何にも幽遠閑雅にして湯仰に満ちて居るものとは、大いに違ふのである。左様な譯であらから、この倫理の思想と云ふものは、大徳と云ふことを押へて掛らんければならぬ。

道並び行はれて停らす。(中庸)

で、いろ／＼道徳上の思想と云ふものは入用なのである。所謂智仁勇の三つは天下の達徳なり。(中庸)

と稱して、智仁勇を兼ねなければならないと云ふことを説いて居る、理智も大切であるし、それから仁愛も大切であるし、又勇氣も缺くべからざるものである。一つを取つて例へば仁愛をのみ骨張してさうして勇を忘れ、或は理智を忘れるならば、その仁愛の道徳と云ふものは病に罹つて、遂に害蟲を世界に流すものである。勇氣も亦然りで、勇氣をのみ力説して、さうして其處に仁愛を忘れ、理智を忘れるならば、その勇は暴虎懼河となつて世の中を害する所のものである。故にこの倫理の調節と云ふこ

ことは、物價調節以上に更に重大問題である。現在我が國の思想を侵して居る所の危い有様と云ふものは、物價騰貴に悩んで居るより更に私は重大であらうと思ふのである。

二 思想調節は東洋の 特色

どうしてもこの調節の觀念と云ふものが思想に無くてはならない。今は智仁勇と云ふこと言つたけれども、當今國家主義であるとか、個人主義であるとか、或は博愛主義であるとか、人道主義であるとか帝國主義であるとか云ふやうな事を言ふのは、是は皆な三角あまたの產物である。一國を維持するに於ては武勇即ち軍備の充實と云ふことは缺くべからざるものであるが、その軍備が理想を失つて偏傾するが故に、其處に侵略的帝國主義と云ふやうな病が生じて来るのである。一國は自國の利益のみを圖るものにあらずして、必ず世界の文化に貢献する、人類の幸福を保障すると云ふ大なる責任があるのである、博愛の精神と云ふものは理想的國家に於ては、初めより有つて居るべきものである併ながら仁愛を説くに於て、その國家の獨立を忘れて、平和主義を極端に唱へ、人道主義を極端に唱へて軍備を廢り、非戰論を唱ふるに至つては、その三角あまたと云ふものは實に嗤ふべきものである。故に現在唱へられて居る

はしたる面相などは、是までの畫家がヨウ表は
し得ないのであるけれども、經典に「いて説い
て居る所を見れば、最も能く調節せられたる人
格である。故に釋迦牟尼を呼ぶ場合に於て、「大
雄世尊」と云ふことは始終「ふの」であるし又「御
丈夫」とも言ふ。丈夫相と云ふ丈夫の相が釋
迦の相であるし、それから獅子相と云ふ獅子に
現はれるいろいろな勇猛な相を以て、釋迦の相
として居る。獅子は欠伸するに就ても小さな欠
伸はしない。獅子が欠伸すると云ふ時に於ては、
實に欠伸でも他の獸類の吃驚するやうな大きな
欠伸をするそれから寝るに就ても少しも怖れを
懷かぬ、他の動物はドンと大きな音をさせれば
ビクッとする、犬の寝て居る所でドンとやれば
ハッと眼を覺ますけれども、獅子はドンとやつ
ても知らん顔をして寝て居る、それで脚をちや
んと行儀よく揃へて寝る。さう云ふやうな獅子
の十一相と云ふものを説いて居るが、すべて釋
迦牟尼はそれを手本にせよと云つて弟子に教へ
た位のものである、即ち釋迦は獅子を以て理想
としたのである。獅子を以て柔軟忍辱と云ふ譯
には行かない、獅子を以て退讓的のものは言
へまい、獅子は實に勇猛の象徴である。彼の
法を説くや即ち之を獅子吼と云ひ、講壇を持へ
れば獅子の像を周圍に彫つてその上に端坐して
居る。始る獅子を愛して居るのであります。左
の次第でありますから、彼が勇猛なる事を愛
して居るのは眞の實際的であります。それから

四 勇に關する聖賢の説

菩薩の爲すべき修行の中に、その一つとして精進波羅密と云ふものを説いて居る位で菩薩行の共通なる道德として盛んに之を言ふのであります。

併ながら今佛教の方の話に這入つて行く前に少しばかり儒教の方からこの問題を話して見たいと思ふ。

儒教にもいろ／＼ありますべく、今日は唯だ論語の中の一节を引くに止めで置かうと思ふ。

子曰く、君子の道なるもの三あり、我能くする無し。仁者は憂へず、智者は惑はず、勇者は懼れず。子貢曰く、夫子自ら道ふなり。(論問第十四)

と云ふことがある。孔子が君子と云ふ者には三つの資格が無ければならぬけれども、私は逆もそれは出来ない、その三つの資格と云ふのは、一は仁者であるが、仁者と云ふのは詰らぬ事を心配せぬと云ふことである、それから智者は、事に當つて天命に安んじて惑はぬと云ふことである、それから勇者は、事に當つて如何なる困難に遭遇しやうとも懼れを懷かないと云ふ事だか是はちよつと出来ないと云ふことを言つた。所が弟子の子貢が之を聞いて、あれは先生は出来ないと云はれるけれども、自分の志して居る理想を語られたので、先生自身はこの智仁勇の三

四 勇に關する聖賢の說

所のいろいろの主義を嚴密に分解すれば、多くは是れ偏頗の思想にして、即ち調節を誤つて居る所の產物であると斷定して、少しも間違ない事であります。モツと猛烈に、峻厳にその三角あたまを攻撃することに於て、初めて國家はその禍害を免れることを得ると私は信じます。

こう云ふ傾向は何れより來つたかと云ふと、這是西洋思潮より齎したるものである。古來東洋の人方が佛教を學ぶにしても、儒教を學ぶにしても、思想の學者としては、決してさう云ふ偏傾に陥る者は無かつた。それは東洋の思想は初めからその偏傾に陥ることを警めてある、即ち小にしては正心誠意より大にしては治國平天下に至るまでを、一貫したる道徳觀念を以て教へて居る、其處が洵に大事なことである、眞に透徹せる所の道徳であつたならば、個人の上に考へても、家庭で考へても、は國家天地宇宙に於て考へても、一貫したる所の眞理を有たなくてはならぬ。西洋人の如くに、個人としては人格が完いものであつても、國家としての行動には正義を無視する、個人としてはゼントルマンであるけれども、そのゼントルマンが集つて國家を成すに拘はらず、國家の行動としては勝手放題の事をやると云ふは、實に誤まれる文明の實證である。併ながら彼等は公然之を是認して居る、左様な事を東洋人が學ぶ必要はないのであります。

三 勇猛精進の典據

りも一層必要ありますが、併し今はさう云ふ問題に就てお話しするのではない。唯だ一種の倫理の方面、即ち「勇猛精進」と云ふ講題に就てお話をされるのであります。この講題を述べるに方つては、豫め今宵ふ倫理の調節を忘れてはならぬから、物價調節に因んで一言した次第であります。

三 勇猛精進の典據

そこで「勇猛精進」であります。是は「ゆうみやう」である。この言葉は佛教の言葉から出て居るし、大部分佛教で用ひるから、やはり「ゆうみやう」と訓んだ方が宜からうと思ふ。この「勇猛精進」と云ふ漢字は、佛教の經典の到る處にがあるので、法華經などにも有名な方便品と云ふ所に、この勇猛精進と云ふことがある。又序品と云ふ所にもある。それから淨土宗や真宗の阿彌陀經の中にもあり、その他有ゆ便品と云ふ所に、この勇猛精進と云ふことがある。この「勇猛」と云ふことを非常に強く説いて居る。或る人は誤解して、お釋迦様は「柔和忍辱」を本としたものだと思ふが、それは非常に間違つた思想である。釋迦牟尼は調節せられて居る。或る人は誤解して、お釋迦様は「柔和忍辱」を本としたものだと思ふが、それは非常に間違つた思想である。釋迦牟尼は調節せられたる人格であるから一面に柔和忍辱を具ふれども、他面には實に勇猛獅子をも挫くやうや勇氣を有つて居るのである。釋迦牟尼の風貌を描くだけの畫家が居らぬから、優しく描けば眼を瞑つただけに描いてしまふ、釋迦牟尼の勇猛を表

方面を調節して居る所の人格であると言つた。
所がこの勇と云ふことに就ては、餘程吟味を要するので、其處が三角あたまの方から行くと元氣さへ良いければ宜い、何でもやれと云ふやうな事で、勞働問題で騒ぎ立てるやうな事になるのであるが、さう云ふ事は頗る良くない事である。是は孔子もその點を注意して、勇を説くには警戒を與へて居らるゝ。
勇にして禮無ければ即ち亂る。
勇氣を獎勵するからと云つて、秩序を尊敬する精神を缺いたならば、必ずや國家が亂れてしまふ、勇は貴いけれども、之を調節するには秩序の觀念を打立てなければならぬ。
子曰く、勇を好んで貧を疾むは亂なり。(泰伯第八)

云ふ男は即ち剛勇なる者ではありませぬかと言つた、所が孔子が云ふには、申根ナンと云ふ男は慾張り極性があつて、低い詰らぬ事を考へて居る奴であるから、あんな者は何も剛者と云ふ譯のものではない、剛者と云ふのは正義を以て立たなければ、眞の勇氣と云ふものはあるものでない、亂暴と云ふのは、決して勇氣でない。『恨や慾あり焉ぞ剛を得ん』とは如何にも聖人との教訓として尊いと思ふのであります。故に、子路曰く、子三軍を行らば則ち誰と與にせん。子曰く、暴虎憑河、死して悔なき者は吾與せず。(述而第七)

何にせんと、子を思ふ所の愛の爲に元氣を振立てゝ、又何等かの働きに就くやうなもので、仁者は必ず勇氣を有つけれども、併し勇者は必ずしも仁愛の精神を有たないと言はれた。道徳上から現はれて来る所の勇猛と云ふことは、今日の反抗性であるとか、暴動性であるとか云ふやうな、慾を根本にして進む所の、元氣らしいやうな似非元氣をば、悉く之を否定する所のものである、之を前提としなければならない。無闇に氣が荒くなつて、石をぶつけたり、ピストルを撃つたりする所の勇氣は、要らないものである。さう云ふものは寧ろ去勢した方が宜い。それで善い事には元氣が抜けて行き居る、理想に依つて聞ふには元氣が無くして、慾に依つて戰ふ事にのみ元氣があると云ふは、即ち今日の憂である、世界を通じての憂であります。それは理論上如何に巧妙なる説明をしても、慾を根本にして相争ふに至つては、その歸結する所は、唯だ叛亂であるのみ、憎惡嫉妬あるのみ、到底人生の社會を調節し得べきものでない。即ち「利益の觀念は奪はずんば厭かず」と云ふ所まで行くのであるから、或る程度に於て相當なる利益の保證は要求しなければならぬけれども、それ以上は德を以て之を節するより外途の無いものである。私はそれが即ち道徳の眞實であると信じます。併ながら決して利益の觀念を全然放擲すべきものではない、無論孔子と云ひ、孟子と云ひ、是等の人と雖も、みな利殖の事は教へて

昔から考へられて居る事であります。そこでどうしても今日の場合は於て重き必要を有つものは、即ち正義の觀念を本にしたる勇氣である。所謂義を見てせざるは勇なきなり。(爲政第二) で、義——即ち正義が前提である。丁度孔子が天徳を予に生せり、桓魋其れを如何せん。

(述而第七)

又

と言ふたのが、最も良く彼の勇氣を現はした所である。自分は敵に包圍されて捕虜になつて居つても、何も怖れることは無いと言つた、その勇氣と云ふものは「天徳を予に爲せり」と云ふ徳を本にしての勇氣である、此處が如何にも尊いと思ふ。日本軍人の勇氣も、是は義勇奉公といふ、やはり「義」を前提としての勇氣である。

先帝の軍人に賜はつた勅諭にも、小勇、大勇を分けて、小勇は警められて居るのであります故に勇猛精進と云ふ德目を講するに就ては、この義を前提とする云ふことが、最も大事な着眼點であると考へる。(未完)

日蓮聖人教義綱要

井村日咸

第七章 發心

懺悔的發心

人の性は善也とは孟子の仰せられたことであるが、如何なる無道のものと雖ども己が非道の所作に對しては多少の反省する者は持つて居る、盜をするものゝ最初は済ぬ事をした、悪い事を働いた、モ一決して盜はせぬと考へるそうだか、又ムラ（）と惡心が起り、遂には平氣になる様になると云ふことであるが、人間は天賦の性質として良心の無いものは無い、其良心の發動して常に反省を促しつゝ日常の行為に警戒心を與へて居るのである、此良心の發動して向上的に其途を求むるに至つたのを宗教では懲悔的發心と云ふのである、一切人の良心の發動に由る發心なるが故に發心の中には最も大部分を占めて居る、人生の裏面には隠れたる罪惡の多々なるものあれば、自然の要求として之を救濟を宗敎に求めて慰安を得んとするに至るのであ

る、世には積極的に罪悪を犯されば我に罪なし
しと考へて居る人もあるが、必ずしも自ら進んで犯した罪悪はなくとも、不知不識の間に犯した罪悪は渺小なるものであろうと思ふ、大
きな生物を踏殺した事もある、時の都合で蟲
言を言ふ事もある、人の利益を妨げた事も
あらう、道徳的に觀察して厳密に批判したなら
ば我等が至極の善人と考へて居る人でも犯せる
罪悪は夥しきものであらうと思はれる、況んや
其以下の辛ふして刑事上の懲罰を免れて居る位
の程度の仲間はウヨ／＼と充満して居る此世界
に日々夜々に作らるゝ罪悪は計り知るべからざ
る事であろう經に
是の諸の罪の衆生は惡業の因縁を以つて阿僧
祇劫を過れども三寶の名を聞かず（毒量品）
とあるが、我等娑婆世界の一切衆生は無始已來
の罪悪の因縁に依つて現に迷界に墮在して苦惱
を受けつゝあるのである。
右様の次第であるから、何れの宗教でも懺悔
減罪を説かないものはない、基督教では「悔改」と
説き佛教には「六根懺悔」を教へて居る、法華
經の結經觀普賢經は懺悔の方法に就いて委細に

説明して居る、人にして懺悔の精神反省の力が無いなら、到底向上發展の途に上ることは出来ないのである、佛陀は増上慢を非常に戒められましたが、慢心は我々の自省心を奪い、懺悔の心を生ぜざらしめ、向上的途を塞ぐものなるが故にである、大乗の教を信するものゝ中に、懺悔減罪の説を軽んじて浅劣なり杯云ふものもあるが、此は大乘説と稱して増上慢に墮入つた邪説に過ぎない、大乗の教義と雖とも懺悔せずして罪惡の消滅を言ふ様な罪惡を獎勵する如き事は説かないのである、若し有りとすれば邪論曲説にして佛陀の正説ではない、法華經は大乗の眞髓極説なりと雖とも、懺悔を説いて向上的要路と示されてある、今觀普賢經に依りて六根懺悔の有様を略述致さうと思ふ、觀普賢經に無量世に於て眼根の因縁を以て諸色に貪著す……色汝が眼を壞つて恩愛の奴と成る……色汝を使ひ三界に經歷せしむ、此弊使の爲に盲にして見る所無し……諸佛菩薩の慧眼法水頗くば洗除して我をして情淨ならしめ給へと遍く十方の佛を禮し、釋迦牟尼佛と大乗經典とに向ひ奉つて是を説け、我今懺する所の眼根の重障蔽濁にして盲にして見る所なし、佛願くは大慈を以て哀愍覆護し給へ

神に著くが如し、諸の惡聲を聞く時は煩惱の毒を起し處々に惑ひして暫も停る時無し、此聲を出して我識神を勞し三塗に喰墮せしむ、今始て覺知して諸の世尊に向ひ奉つて發誠懺悔す。

(四九七) 香を貢するを以ての故に分別諸識處々に貪著して生死に堕落せり、汝今當に大乘の因を觀ずべしに懺悔せよ。

(四九八) 此舌根は惡業の想に動ぜられて、妄言绮語惡法を非法と説く、是の如き衆多の諸の雜惡業障遷亂口兩舌誇謗妄語邪見の語を讚歎し無益の語を説く、是の如き衆多の諸の雜惡業障遷亂

(五〇二) 左の如くお示しになつて居る。二十五有一切の生處に満てり、亦能く無明老死十二の苦事を增長す、八邪八難中に經ざること無し、今當に是の如き惡不善の業を懺悔すべし。已上六根各別の罪障に就いて其懺悔の法を示されたのである、其懺悔の効果を經に説いて左の如くお示しになつて居る。

(五〇七) 一切の業障海は皆妄想より生ず、若し懺悔せんと欲せば端坐して實想を思へ、衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す、是故に六情根を懺悔する者如くお示しになつて居る。

(五〇八) と、六根の懺悔は能く過去遠々劫の罪障を消除する力を有するのである、迷信者流の中に罪障消滅を祈るものもあるが、至心に懺悔せずして、罪際の消滅を求むるは本に縁りて魚を求むるの類である、日蓮聖人示して曰く、

夫滅は水にしづみ、雨は空にとどまらず、蟻子を殺せる者は地獄に入り、しかばねを切れ大船の力也。大火を消す事水の用に非らずや、大逆なれとも懺悔されは惡道をまぬがれず。

(縮道一四二)

悔には信仰の大切なるを示されたのである、更に懺悔の大切なるを示されたのである、更に懺悔には信仰の大切なるを示して

如く、法華經の妙の一宇は小火の如し、小火根の中に至る、此六根の業枝條葉悉く三界

を信じ天道を認めて、其處に道義の根柢を置くならば道徳は人の爲めに行ふのではなく、自己の爲めに行ふのである自己の向上發展の爲めに進んで道徳の實行に勤まねばならなくなるのである、如何に犠牲的道徳を説くもそれが自己に益するものでなければ之を否むは人情である、人に強らるゝまでも無く、自己保全の爲め宗敎は其點に充分の説明を與へて他の爲めに勞するは畢竟自己の爲めるを教へて菩薩行として利他の行を奨勵した法華經には

在家人出家の人の中に於て大悲心を起し、非苦來に於て慈父想を起し、諸の菩薩に於て大慈慈心が一切道徳の根柢と爲すべき化他利道を成すへし

(九五) 在家人出家の人の中に於て大悲心を起し、非苦

此等は大慈慈心が一切道徳の根柢と爲すべき化他利

居士の遵守の法則として

當に正心にして三寶を誇せず

し師長を恭敬し、正法を以て國を治め人民を

を邪枉せず、力の及ぶ處に不殺を行せしめ

る當に深く因果を信じ一實の道を信じて、

佛は減し給はずと知ると云ふことは道徳の根柢

と示された、此中因果を信じ一實の道を信じて

衆生につきねは衆生燒亡するのみならず大木大石皆焼失ぬ、妙の一宇の智火以て此の如し、諸罪消ゆるのみならず、衆罪却て功德となる、毒藥變じて甘露となる是也、言へば黒漆に白物を入れれば白色となる、女人の御罪は漆の如く南無妙法蓮華經の文字は白物の如

なる、と仰せられた、我々今日の苦惱其根本たる罪業を打消さなくては消滅しない此を消滅するこそは、信仰に入つて其罪を發露懺悔するの外無きことを自覺して發心するを懺悔の發心とは言ふのである。

(縮道一八一六) と仰せられた、我々今日の苦惱其根本たる罪業を打消さなくては消滅しない此を消滅するとは、信仰に入つて其罪を發露懺悔するの外無きことを自覺して發心するを懺悔の發心とは言ふのである。

と仰せられた、我々今日の苦惱其根本たる罪業を打消さなくては消滅しない此を消滅するとは薄弱である、從つて其行為は徹底的でない、先帝の御製に

目に見えぬ神の心に通ふこそ

目に見えぬ神の心に通ふこそ

道徳の實行に就いては其根柢が確立して居らねは眞の道徳は行はれない、義務的の道徳社會の制裁に餘儀せられて行ふ道徳の如きであつて思ふは人の道と云ふてある、誠意が根本と成つて此より一切の道徳的行爲は發現して来るので

と仰せられたが、人の心の誠と云ふのは道徳の根柢を言はれたのである、中庸に誠は天の道之を過未を知れとも父母を扶くる道なし、佛道こそ父母の後世を扶くれは聖賢の名はあるけれども法華已前等の大小乘の經宗は偏家の孝養は今生にかぎる、未來の父母を扶けされば外典の聖賢は有名無實なり、外道は人は父母の孝養も法華經の信仰に依らずんば徹底せざるを示して、開目抄に

とあります、人のこころのまことなりけり思ふは人の道と云ふてある、誠意が根本と成つて此より一切の道徳的行爲は發現して来るので

と仰せられたが、人の心の誠と云ふのは道徳の根柢を言はれたのである、中庸に誠は天の道之を過未を知れとも父母を扶くる道なし、佛道こそ父母の後世を扶くれは聖賢の名はあるけれども法華已前等の大小乘の經宗は偏家の孝養は今生にかぎる、未來の父母を扶けされば外典の聖賢は有名無實なり、外道は人は父母の孝養も法華經の信仰に依らずんば徹底せざるを示して、開目抄に

と仰せられたが、人の心の誠と云ふのは道徳の根柢を言はれたのである、中庸に誠は天の道之を過未を知れとも父母を扶くる道なし、佛道こそ父母の後世を扶くれは聖賢の名はあるけれども法華已前等の大小乘の經宗は偏家の孝養は今生にかぎる、未來の父母を扶けされば外典の聖賢は有名無實なり、外道は人は父母の孝養も法華經の信仰に依らずんば徹底せざるを示して、開目抄に

と仰せられたが、人の心の誠と云ふのは道徳の根柢を言はれたのである、中庸に誠は天の道之を過未を知れとも父母を扶くる道なし、佛道こそ父母の後世を扶くれは聖賢の名はあるけれども法華已前等の大小乘の經宗は偏家の孝養は今生にかぎる、未來の父母を扶けられ、而れども法華已前等の大小乘の經宗は自身の得道猶かなひがたし、何に况んや父母をや但文のみありて義なし、今法華經の時こそ女人成佛の時悲母の成佛顯れ達多惡人成佛の時悲父の成佛顯はれ、此經は内典の孝經なり

己 推理的發心

此は理智の満足を求んとして哲學的思索に依つて宇宙の靈力を認め遂に宗教の信仰に入るのである、宇宙は無限なるもので到底吾等の小智に及び難き處ではあるが、然しながら、天地の運行と云ひ四時の變化と言ひ、其處には何等か偉大的勢力が存在するにはあらずやとの疑の

生するは當然の事である、科學の進歩は或程度迄は説明するが、眞理の全部は解説することは出来ない、人智の理解し得る程度迄を認めて、ヨリ以上は此を如何に處置せんとするかを云ふに至つて、哲學と爲り宗教と爲つて吾人の疑惑の一部を解説せんとしたのであるが、吾人の知識の有限なる以上無限の宇宙を知り盡す事は不可能である。そこで哲學は疑を以つて永久に其研究を繼續して行くのであるが、其思索より入つて不可知な境界に對し信念を以て進んで行つたのが宗教である、故に推論的とは言ふものの眞理の極に達することは不可能なるを以て可知界に對する理解より推論して不可知界的靈力を信じて信仰に入り得る之を推論的發心と云ふ故に推論的に入り来るものは一步も誤ると疑を生じて遂に信仰に入り得ざるに至る。

唯佛と佛とのみ今しき諸法の實相を究盡し如是力、如是作、如是因、如是緣、如是性、如世間、如是報、如是本末究竟等なり。

法門を説いたが、我々の智慧では一寸は分らぬといふが、天台大師は此文中に依つて一念三千の法門を説いた。我が本の思想はあつたのである、然し此思想が本當に根強く正しく發揮されたのは日蓮聖人に依つて始めて完全なものと爲つたと私は信ずる。

△西洋思想の偏傾

此事は後に述べるとして日本文明が三教の一に依つて進んだのであるが之を西洋文明に比較して見ると面白い對象である、一體神ながら道は神の精神に依つて進むべきものであり佛陀の道は佛陀の絕對の見地から説かれた事を吾人は只々實行するのみである。然るに西洋文明の歴史を見るに人間各自が研究的に進んで來たものであつてキリスト教にしてもキリスト自身の説いた儘のものではない、キリスト教の價值とする處はジユデヤの思想に印度の梵の如き思想が加はつた處にあるので、人間界に現はれ人を救ふ處に宗教の價值があるべきに、キリストの説く如き神は結局吾人の考には及ばない。凡そ救世的には絶対人格として此娑婆に現はれて始めて價値あるものである。一體人間は一面には非常に立派な處があると共に一面極めて劣悪なるものである、傀儡師の箱の鬼も佛も自由自在に出せる様に人間には良性質と惡性質がある。ギリシヤ哲學は宇宙觀に偏する之に反して人文學派は之に反抗する、そこへ持つて来て

流れると入り難いから理屈は一通りアツサリと研究する程度でなければならぬ、然し全然理屈の無い感情一邊のものでも行かぬ、そこが適當に調節せられねばならぬ、法華經は一面に諸法實相の理論を説いてあるが、それを佛の證悟の中に包み容れて慈悲に結んだ處に宗教として理の無い感情一邊のものではあるが、其目的として進む處は故に研究的態度より入つても其に満足を與へ得る教義である、故に法華經藥草喻品には慈悲の各方面に圓滿なる作用を有する教である。故に研究的態度より入つても其に満足を與へ得る教義である、故に法華經藥草喻品には世間を尤足すること雨の普く潤すが如し、貴賤上下持戒毀戒威儀具足せる及び具足せざる正見邪見利根鈍根著しく法雨を雨らす。

と説かれたが此經は推論的信仰に入るものをも

大日本文明之價值

本講演は大正八年四月七日山武統一閣支部聯合講演の大章也未だ校閲を経ず文責記者にあり

陸軍少將 野澤悌吾

▲聖德太子の憲法道德の根柢

私の今晚の演題は大日本文明の價值と云ふ事で一條の自分の信する處を述べて見たいと思ふのであります、抑も日本の文明は神儒佛三教の融合したるものであります、そしてそれは源を聖德太子の憲法に發して居ると思ふ、聖德太子

の憲法は現今の帝國憲法の如きものでは無い、今の憲法では思想の根柢道徳の根本に立登ると云ふ事が缺けて居る、伊藤公始め制定當時にも止むを得ず不完全ながらも之を制定するの止むを得ざるに至つたのである。之に反して聖德太子の憲法は道の根本に溯つて居るのである、此

とある、此歌は各宗で佛教の分裂を辯護するに使ふが、そんな意味ではない、發心の動機は色々あつても佛の教に入つて導かる處は一つで結局同一の途を辿るのであるから、古歌に分け登る處の路は多けれども、同じ高嶺の月を見るかな。同し高嶺の月を見るかな。

純信仰的に入るものをも、満足せしむべきを說いたのである。以上各方面的發心は人各其境遇を異にする以上其動機には種々の相違を来たすが、此各種の内に入らぬものは無い何れの方面より發動して來やうか、其目的として進む處は

然らば日本の三教一致は如何様に融合されたかと云ふに三教は抑の根柢に融合點があるのである。それはいづれも天地の公道に於て一致して居て、神道に現はれて居る天地の公道は天地の溫き温情即ち儒教の仁であり佛教の慈悲である、神武天皇の建國の大理想たる御詔勅の天の道に依つて人民に各々其處を得しめんとするものである。此根本に打ち立つて日本文明を行はるゝの秩序である、基督教には之を義と云ふ川時代の如き本儒教は佛教者の研究して來たものが一轉して林羅山の様な一つの儒者を生じた歴史を有する事、吾人のほこりとすべきである。

▲三教一致融合點

ある、妙法蓮華經の妙が之に通するものであると思ふ。以上は即ち三教通一なるべき一つの根柢である、ヨーロッパの博愛の思想は精神は親しい人と自分の親との間にも秩序を見ないもので、天地の公道に違反するものである。三教は天地の公道を本として堂々として進展したるものであつて此内容を富しむるものは佛教と儒教である、之に依つて逐次進展し來つたものである。

▲排他的弊害

然し此處に考ふべき事は往々にして一か他を排斥するが如き態度に屢々出でた事である、徳川時代の如き本儒教は佛教者の研究して來たものが天の道に於ては、人間の眞心を養ふ處に修身齊家乃至治國平天下なる根柢を以て進んで來たのが後に天を排し後には佛陀をも排するに至つたのである。然し山鹿先生の如き又水戸學派の如き皇室を常に念頭に置いて來たものは良いが他の皆いけない神道も亦さうである、明治維新に成つて復古神道に只々依らうとした事がある、此處にも大きな缺陷を生じて他を一切取り入れないと云ふ考へから西洋文明輸入の力をも非常にいそいだのである、處が此處に西洋文明が入つて來て思想戒められた處のものである。一が他を排すれば

共に倒るとある、之にもかゝはらず後世の人が之を誤つた事は異々も惜むべきである。

▲外國と我國の國風

如斯く我かんながらの道は仁義の精神を元とする、故に國王の聖徳より見れば他國にはとても見る事の出来ない美點がそこにあるのである。他國で見ると例へば暴君があるとすると之に對して怨み骨髓に徹すると云ふ様な事がある、ルイ十四世の國家は我らと云ふが如き凡て斯う云ふ風に利己的な考であるそろすれば、そこに反抗的の精神が起つて之が革命の元となるので、之が露國に這入つては今の様な救ふべからざる波瀾を來すのである、之は文明では無くて野蠻の極である。孟子の所謂る喬木より幽谷に移る者とは正しく之である、獨逸然り、英國然り、凡て如斯く反抗的である、然るに日本は歴代何とも云へない尊い光りを放つが如きものがある。歴代の御詔勅を拜しても他に何處の國に對比類がありませんやうか、山陽は漢の文帝の世を見るが如しと云つて居る、彼等歐洲人は捕虜に對する道徳を説きつゝも之を生き乍ら穴を掘つて埋めたと云ふ例しさへもある、之は英國から出た書物に見える獨逸の殘虐を云つたのであるが獨逸ばかりではない他も比々皆然りである。神后皇后の三韓征伐に捕虜を斬寧に取扱つた例さへもある我國である。今日朝鮮人等が如何に此思想に依つて居るかは能々考へねばならぬ

處である。我國人は大體にて源平藤橘等凡て天皇の御末に當るもので多少他の血がまじつて居るも御皇室の仁政に依つて凡て同化せられたものである。

英國の印度に對するが如きを見れば其征服したる世界の六分の五の五億九千の人種に對する迫害は實に無誠なるものがある。爲に彼等征服せられたる國民は君臣離散し父子流離するの有様は實に氣の毒なものである。我國の朝鮮併合の如き決して征服被征服の意味は毛頭無く全く上御一人の仁政東洋に及ぶの一證であるにもかはらず、我國民の一部には征服者に對する様な態度を取るものがあると云ふ事は實に遺憾な事である。先帝陛下の御製に「四方の國皆はらからと思ふ世になど波風の立さわぐらん」とあるを拜しても聖恩無窮なるに感泣せざるを得ない。我は戦を好む者では無いが正義の爲には餘儀なく戰ふものである。此仁愛の御精神は一には報恩の觀念より起るもので前講師の民は御寶也と云はれた、あの御精神が加はつて仁政あまねく至らざるなきものである、御精神を體得して行く處に凡ての道德がある、此國民道德を根柢として其處に儒佛を加味したるものであるから、日本を研究しやうとするならば必ずや皇室を中心として考へなければならぬ。

◆日本文明と日蓮主義

これから日本文明は日蓮聖人に依つて完全に

漫な誤つた信仰に歸し去つたのである、眞の宗

キリスト教の一神教が卓越して居ると云つて
も日蓮聖人の主義に比すれば實に云ふに足らざ
るものである。聖人の本佛觀に依れば釋尊は天
の一日凡ては萬水に浮べる形であるとして一切
統一の佛陀を活現し來つたものである。
皇室に對しても聖人は亦同じ考を有せられた
のである、かくの如く日本文明は皇室中心のも
のであつて最近先帝陛下の大事業等は凡てかう
云ふ皇室の上に建てられたるものである、困苦
缺乏に堪へて四年餘の間戰つた獨逸國民もあ
れだけの忍耐力を以て勇戦した國民であるけれ
ども一朝主權を失つて見れば實に目下の情勢の
如くで我國と謂ふも皇室を除いた我國は實に非人
道的桎梏の間に呻吟しなければ成らんのである
から考へて見れば全く日本から皇室を除いては
日本と云ふものは無い、今はデモクラシーの問
題もやかましいが外來思想を其體植え變へたもの
のは何等の價値があるものでは無い、此三千年
來の温かい文明を改造すると云ふ様な事は全々
餘計な事である。イギリス等はあれ丈の大富國
であるけれども六十歳以下のもので國家の扶助
にあづかつて生て居た者が、六十一萬人もある
之に較ぶれば日本なぞは殆んど無いと云つても

▲最善最美の日本

いゝ位である、凡そ日本の父子の關係の様な澤
か味は西洋には見度くも無い事で外人は子の恩
惠と云ふ者は全く感じて居ない、或は四兒制だ
とか三兒制だと甚だしきに至つては無兒制を
迄唱へるものがあると云ふ国情である。此故に
至つては世は全く澆季と云はざるを得ん。日本
は此明媚なる風光に接した丈でも人格を大成す
る事が出来る様に成つて居るので、人間の尊さ
は全く報恩の念と感激に依つて其光を現はすもの
で之を若も物質的にばかり見て來れば其文明
と云ふものは極めて貧弱なるものと成つてしま
うものである。此報恩感激の念に就ては一切を
日蓮聖人の一世に學ぶべきものがある。

國家の算

▲國家の尊重
次に本門の戒壇の志想は國家志想であり世界志想である、淨土の易行道の様に國家も人世も道徳も之に關しないと云ふ模な考に大反對のものがある、又キリストの主張の如きも淨土門に類するもので凡て吾人は空中に位する事の出来ない限りは國土に根柢を置かねばならぬと云ふ事は當然の歸結である、個人の成佛より國家の成佛に達し世界人類依正の成佛に至つて始めて眞の成佛の大成したるものと見るべきである。國家の安定を得て居ない處はちようど現今の支那の如きもので彼の國民性としては個人を守る事に於ては卓越したるものがあるとしても國家の混亂の中にあつては如何ともする事は出來ない。

▲佛性と大和魂

次に佛性と大和魂に就て一言すれば、日本人全般に古來備はつて居る處の大和魂が我が皇室に忠なる心に眞に目醒たる處は佛性に一致する。彼の禪宗の思想の様に他に關係しないで只單に自己を標準とする様なものはデモクラシ 1に類するものである、西洋の志向では或は平等等と云へば平等の方へばつかりツ、パリ、分析して物を考へると云へは分析にばかりツ、ハルと云ふ風ではちょうど唐白の樹なもので此方が舉がれば彼向が下ると云ふ様に何時迄經つても

は達を遂げた事に付いて一言するが、一體國家の文明も世界の文明も凡て日蓮主義に依らなければ、眞の發達は見られないものである、殊に馬本法華の精神を正位としなければならぬ、其點に於て見れば上總の七里法華は實に世界の奇跡とも云ふべきである、日蓮聖人は常に法國交合を説かれたが之は天地の公道と云ふ方からも見られる事が此處に至つて如何にも徹底的に云ひ現はされて居た。

▲誤れる宗義

第一に日蓮聖人の本佛觀と皇室觀は餘程一致して居て、日蓮聖人の本佛觀は宇宙の實體の人格的に現はれたる活現の佛陀に對して最も根柢ある哲學の根據に立つて偉大なる信念を發せられたるものである、人世はその本源に歸らんとして信念を起し本佛釋迦牟尼世尊に歸らんとするものである、眞言宗では六方に依つて宇宙は作られると云ふけれども其作らるゝと云ふ事柄のみでは宗教としては何の價値はあるもので無い、自分はもと眞言宗であつたが其非を知つて法華宗に附録したのである、自分は軍人であるから降参は恥であるけれども正義に向つては降らざるを得ない、否喜んで歸入するものである。彼の油の音松翁の一韻が佛陀の説教であるから降參は恥であるけれども正義に向つては降らざるを得ない、否喜んで歸入するものである。彼の油の音松翁の一韻が佛陀の説教であると云ふ様な夢の様な佛陀觀は吾々の取る處ではない、今日日本人の多くの信徒を有する阿彌陀佛の如きも亦一大缺陥のあるもので從つて散

女子解放論

(大乘の見地に立ちて)

松尾鼓城

緒言

完全を期する事は到底出来ない佛陀を信じて佛陀に統歸せられたる處、皇室に對して眞に尊崇の念を以て集り皇室に統歸せられたる處と吾人に個人に偏るのは最も忌むべきものであるけれども大なる道の上に立つ大なる個人主義よりも云ふべきは實に日蓮聖人である、眞實の大慈悲と大智慧との極に達せられたるものは佛陀であつて人格の修養に就ても今日西洋思想と云ふ處の自我と云ふ様なものは人間の性質の中の混つたものは出でても清いものは出で来る様な事は無く理論上の話で事實の上には害はあつても益なきものである。

そこが佛陀の大慈悲と同じく御皇室の民に向かはせらるゝ御心持ち實に赤子を見るが如く實に其性は父子の如くであらせられる、故に吾人の天皇の赤子であると云ふ自覺と佛子の自覺とは共に一致したるものである。

法國冥合

支那人は女子を劣等視することは徹底して居る。彼の國の惡風なる纏足の如きを我が國の徳川時代に行はれた刺眉と同一に見ることは能ぬ。刺眉は他の妻となつて再び良夫に見えまいと誓つた心を外見に現したのである、この風俗の良否はしばらく措き、之が決して女子の壓迫から來たものと見、女子の苦痛と見ることは能ぬ。形容して欣んで居るのである、この此に至つた代から足を裹して指部の發達を止害し長じてヨーロッパと危ふく歩む様を運ぶとか何とか視する意味が充分であつて、我が婦人が眉を落としたなど、兎ても比較にならぬのである。したがつて思ひ牛に過ぎるであらう。簾中とはエライ敬意を表したやうであつて實は體のよい座敷牢である。其の婦妻たるものは他の男子とは容易に日本の中にも婦人を私有物視し玩弄物視した時代もあつた。特に徳川時代を以て然りとする。其の時代に於ても武家に於て然りとする。彼の將軍や諸大名が其婦妻を「簾中」と稱するに於て思ひ牛に過ぎるであらう。簾中とはエライ敬意を表したやうであつて實は體のよい座敷牢である。其の婦妻たるものは他の男子とは容易に

(三) 簾中

(二) 支那人の纏足

言葉も換されない、只主人一人が眺め且つ樂しむ道具である玩弄物である。將軍の奥方が其病んで典醫が絶脈を探つたと云ふ如きも滑稽のやうで實は悲惨な譯ではないか、而し之も我國では中途の產物である、否産物と云ふよりか外來物である、實は支那から輸入した風習であつたのだ、本家は實に支那であるのである。娘中には奥深く纏足の婦人を自己の慰み物、子を産む機械視のよりも尙甚しきは娛樂の對手、情慾の満足物位に思つて居たものもあつたか知れぬ、子は慾情當然の副產物位に思つて居た者もあつたかも知れぬして居た支那人、支那人の中に奥深く纏足の婦人を自己の慰み物、子を産む機械視のよりも専甚しきは娛樂の對手、情慾の満足物位に思つて居たものもあつたか知れぬ、

この題名は或は不當かも知れない。女子本性論とか女子人格の完成とか、女人成佛論とか題した方が本當であるかも知れぬが、近來デモクラシーで解放といふ言葉の流行に任せて假りに女子解放論と命名したまでに過ぎぬ。元來女子の解放は泰西に於ては女子の束縛から免れんとし及び此の東洋に就ての同情から起つた説である。又東洋に於ても從來多くは女子が男性に對して一人並に考へられて居ないのであるが、然るに佛教大乘には女子に同情といふよりは女子本來の面目を啓發し尊重して之を解放する點を男子と同様に認識される事實があるから、即ち此事を此に一論し試みやうと思ふのである。しかし其骨子は法華經と日蓮聖人の遺書を經として讀むのであるから、纏ち大乘の見地

に立ちてと別題したわけである。

（一）日本人の女子觀

我國に於て女人に對する缺點弱點を數へられたものも多くは支那や印度から傳來された婦人觀を受けついで女子を劣視せんとした位のものは本來には餘り多くない、寧ろ強點が數へられて居る（これは後に云ふ）。其弱點を數へられた彼の女、大學なども亦徳川時代固陋なる儒学者が支那思想を受けた一偏言に過ぎぬのである。落語家の材料になつたのは、女子を軽んじ無教育を強めた徳川時代の一部の女子に對する輕い觀察の一面であつて、眞に日本女子に對する眞觀察ではないのである。一時女子の實典の如く見られた彼の女、大學なども亦徳川時代固陋なる儒学者が支那思想を受けた一偏言に過ぎぬのである。業平の歌の「律をいてされたる宿の憂れたきはかりにも東のすだなりけり」とある其鬼といふは女人をよんだのであるとも云ふが、しかし之を以て其時代の女子の全部に對する觀察で

(四) 重婚

蓄妻は我國にも行はれた事であり、現時この風儀は餘程廢れたが其れでも今尚一部には當然に於て是は今日尙依然として此の弊風の儘に來つて居る。

(五) 政治結婚、賣賣結婚

一夫多妻は家康に於て其極を盡して居る。徳川政策が諸侯の相続権を種々條件を附して檢束した爲に諸侯にも旺んに一夫多妻の風を帶び、家臣も亦之にならつたが、其以前から政治結婚は武權者の間に盛んに行はれて之に依つて勢力の權衡を支配したのは元龜天正の頃から常の事であつた。秀吉がお彌々の方が本妻としてありながら信長の妹にして淺井長政の後家お市の方を更に本妻として迎んとして勝家と競争し、後淀君を本妻として容れた(淀は實は妾と云ふよりは第二の本妻として容れたのである)等は其れである。支那では數へるに違がないほどである。王照君の如きは其最なるもので賣買をも愈ねたとも見られる。之が爲にはれなる織田信き婦女子はどれだけ泣いたであらうか。今日尚支那では其妻を娶るに金錢とツリ換にして居るのさへあるに至つては酷も亦甚しい哉である

(六) 下 婦

下婢とは女子の奴隸であり、奴隸とは男子の下婢である。下婢は何と云ふ下劣なる文字を選んだものであるか、下女と云ひ下婢と云ひ怪しからぬ代名詞を使つたものだ。しかし今日の日本は工業漸く勃興し女性の傭人は少なくなつた爲にやゝ人間らしく取扱はれるやうになつたが、この間までは傭人を見ること非人間の如くである

つた。之等の事は今我々が能く承知して居ることであるから此に云はねが、此外淫賣婦藝妓等の事もあるが此に略する。

(六) 女子の三從

三從とは女人は幼き時は親に從ひて心にまかせす、人となりては男に從ひて心にまかせず、年よりねば子に從ひて心にまかせず、斯様に幼き時より老者に至るまで三人に從ひて心にまかせず、思ふ事も云はず、見たき事も見ず、聽聞したき事をもきかず、是を三從とは説くなり。されば榮昌期が三樂を立てたるにも女人の身と道んな文は他にもあるが要は女と生れて來ては立つ瀬がない、人間と云ふは名ばかり一層女に生れて來なかつたならばと嗟嘆することもあるであらう。しかし此の三從説などは我國では殆ど今日では實質は失つて居るけれども、道な思が此間まであつたのである。この虚勢された婦人が賢夫人などと嘲されたこともあつたのである。之等の深い因襲が男子よりも女子に深く沁み込んで、妻君は一兒を十文字に背負ひ一児を左手にひき、前に荷物の袋を垂れ、右の手には御主人公の洋傘をさへ持つて後につき従ひ主人公は巻煙草をくゆらせながら前に大意張りで無手で往くと云ふやうな滑稽的風刺畫の行為はられたのもある。之等の氣分は強ち女子の抑壓から來たのではなく婦人自ら夫を大切にすると云ふ



題「嶺 雲」
子爵 清岡長言選

○天 市外雜司ヶ谷 矢野浪子
○地 下谷區中根岸 小柳律子

○佳 作 朝またき谷の月出で、をちこちの峰よりもぞたゞよふ
○人 千葉縣新治村 渡邊乾航 遠の嶺々

○横雲をけしきとなしてほのくとあらはれ出る
みねの松ばら 京都 中野 正甫

○筑波山峰にたゞやう白雲のゆくへや風の行へな
るらん 千葉縣 江波戸 あき子

○巧なる葦にもまされり雨晴し遠の高嶺にかゝ
しらくも

○いつよりいつくにゆくか白根山見る間にか
る峰の白雲 千葉縣 笠見 樂也

ふ意味から來たのでもあらうが、しかし之はよくない事だから運に改良せねばならぬ事である

三 小乘佛教に現れたる

(一) 婦人の擯斥

『佛世に出てさせ給ひて四十餘年の間多くの法を説き給ひしかも、二乗と悪人と女人とをば簡ひ果てられて成佛すべしとは一言も仰せられざりしに(中略)華嚴經には、女人は地獄の使者なり能く佛の種子を斷ず、外面如苦諦、内心如夜叉と云へり。銀色女經には三世の諸佛の眼は抜けて大地に落るとも、法界の女人は永く佛に成るべからず、と見えたり。又經に云く、女人は大鬼神なり、能く一切の人を喰ふと、龍樹菩薩の大論には一度女人を見れば永く地獄の業を結ぶと見えたり、されば實にてや有りけん善導和尚は傍法なれども女人を見すして一期生と云はれたり云々(法華初心成佛鈔)此の意味には、女子が其本性を現さず、却つて其美貌を以て男を誤らしめ、之を魔道に迷はしめるから、女子其の者を認め且つ之に對して戒心せねばならぬことを教へられて居るのである。女子は斯の如くにして男子より排斥せられたのである。(之は佛及び佛徒の誠であるばかりでなく、當時の女人に對する一般的の認識として見ねばならぬ)

四 歐米人の婦人觀

歐米人は婦人に對する覺醒があるやうである其男女同權と云ふが如きは日本人の見誤りであるまでも、婦人をいたはり愛情を表はすことになるのである、法華經の婦人觀以後を續讀せられたい)。

○ほのくとしらめる空の横雲にそびえて見ゆる
つくばねの山 下總 星野 聖祐

○紫の色に匂ひて芳野山朝日にかゝる嶺のしら雲
千葉縣 福島 正之

○旅枕闇屋は夜半に雲閉ぢて夢晴れやらぬ足柄の
嶺 同 万新舎一止

○遠山の峰にたゞやう黒雲は夕立そらのしるしな
るらん 千葉縣 林 久子

○夏ながらきりかとばかりまこふまで外山のみね
にかかる白くも 同 春日よし子

○大空は晴れわたれども今日もまた絶えずかゝ
り嶺の白雲 千葉縣 並木 うめ

○そひえたつ嶺の檜原に横くものかゝる姿を雄々
しかりける 兵庫縣 内山 昌雄

○槍のこと銳く尖り立ち並ぶ嶺にかかる白
雲 大阪市 竹内 勲榮

○晴れし日もいつしかくもり白雲は比較の高ねに
かなかく車のまことにみゆる霞ふしの高ねにか
れにけり もり白雲 三河島 西澤 明花

○たかちほの嶺の白雲みわたせば御くにの基思は
りけり

婦人對の態度は不良ない。しかし彼に果して根本的に婦人の本性を顯現して居るであらうか、彼等の歴史には兵力を以て婦人を裏奪した事も記されて居る。大戦で男子が少ないと云ふ一時的現象に對して直に多妻論が持ち上るではないか。女子の不足な新聞地に女子の歎心を買ふべく之が婦人對の男子の愛情の起原だとも云ふ説があるが、果して然ば附け焼刃に過ぎぬ。彼等の大部分が信ずる基督教の教旨に従へばアダム、イーブの罪惡の根源を説いた其罪惡觀念は、どうしても人間の心底に暗い物を拂ふことが出来ぬと共に、其婦人の本性を自覺することの出来ぬ都合のわるい事も潛んで居るのである。果して然ば彼も情慾が基本となつた體のよい婦人愛護であつたなら或る事件の突發の場合に於ては此の待遇は自ら破れねばならぬものを有て居るのである。要するに彼國の婦人對の愛も根本的ではないと思ふ。

五 法華經の婦人觀

(一) 緒言

以上の如く婦女子に對する從來の考へでは眞に婦人の人格美を完全せしむることは出来ぬ。即ち婦女子の成佛は出来ぬ。婦女子の解放は覺束ないものである。今般婦女子の解放を幾ら叫んでも其根底から男女同一味の本性と發明する事が出来ねば假令一時の女權は？擴張せられても其れは浮雲である、昔である。水月で

(三) 根本的女子解放の實例

第一第五の卷に即身成佛と申す一經第一の肝心あれば、譬へば黒き物を白くすること漆を雪となし不淨を清淨になすこと濁水に如意珠を入れたるが如し、龍女と申せし小姫を現身に佛になしてましましき。此時こそ一切の男子の佛になる事をば疑ふ者は候はざりしか。されば此經（法華經）は女人成佛を手本としてとかれたり。（千日尼御前御返事に出づ委細は本鈔に就て見られたい）

ある。續て飛散し消滅することになる。故に根本的に男女同一味の根本了解から目醒めねばならぬ。それに大乘佛典たる法華經の真意義に突當らねばならぬ。

(二) 一切平等

かゝりけるかな 静岡縣 佐原 弘風
○み渡せば富士のたかねにしら雲のかゝる姿のおかるしら雲 同 小川 蔭山
○青葉山峰ふきこゆる朝風の心しりてやかゝる白雲 下谷 小柳成之允
○鷺のすむ高峰も物の數ならずたゞひとひとひにこゆる白雲 下谷 小柳英夫
○大峰の上にかゝれる白雲に佛のいますこゝちこそそれ 有田 有田 麗陽
○雨乞の鼓きこゆる大比叡の峰にかゝねり今朝の白雲 同 有田 健山
○かゝるかとおもへば散れる大比叡の高峰の雲のおもしろきかな 同 有田 信子
○嶺のうへにかゝりし雲の今朝見ればそら行器ののほるかと見る 北海道 法谷きよ子
○雨はれて葉木のつゆのかはかぬにまた立ちそむる峰の白雲 麻布 大塚 喜花
○賤の女か神田のさなへとるうに雲そかゝれる高千穂のみね 東京 松尾 鶴子
○朝またき峰にかゝりし白雲のはれ少く比叡の山そさやけき 大阪 池田 貞子
○いつの間にいづこよりこそきたりけめ暫はかかる嶺の白雲 萩鳴 國田 鐵蕉

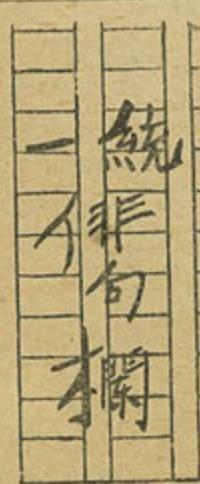
(四) 最高本性の各有

「佛世に出させ給ひて四十餘年の間多くの法を説き給ひしかも、二乗と愚人と女人とをば簡ひはてられて成佛すべしとは一言も仰せられざりしに、此經にこそ敗種の二乗も二逆の調達も五障の女人も佛になるとは説き給ひ候づれ、（法華初心成佛鈔）」
此外月水御書、善無畏鉢、女人成佛鉢、日妙聖人御書、藥王品得意鉢等を参照されたい。殊に法華題目鈔には女人の罪障を説き多くの譬を挙げ女人成佛を示し、是れ偏に妙の一宇の徳なりと結論がしてある、必ず讀むべきの文字であるが、此には紙數の都合で紹介しかねるのは遺憾である。

要するに、法華經は眞の平等觀に入つて女子の根本的解放を致すのである。世の女子解放論者は必ず法華經を読み日蓮主義に這入つてこそ徹底的の見地を見出すであらう。斯くて女人往生鈔には之を讚歎して、此の見地に立つときは如何なる婦女と雖も、漢の李夫人、楊貴妃、王昭君、我小野小町、和泉式部などの如きに生れたんよりも幸福であると稱されるのである。此の眞の女子の地位を知ることが出来ず只當世の虚榮に憇れて居る女輩が憇れさは云ふまでもないが、女權擴張など、浮つ調子の喚叫に女子の眞の解放が出来ると思つて居る連の氣の毒なことが今更の如く感ぜられるのである。

六 日本固有の婦人觀

日本、眼女釋迦佛供養鈔に「日本國と申すは女人の國と申す國なり、天照大神と申せし女神のつきいだし給へる島なり」此一言は大きな意味である。元來普通の考では女よりは男の方を有て居る、しかし之は迷信である。



○訂正 先月課題、九月闇夜草花は闇庭草花の誤植に付訂正

○山かつがわけつゝのほる大みねの雲のこゝろや

樂しかるらん 千葉縣 四本 學子

○山の井の水にうつれる大嶺の雲はさやかに見え

にけるかな 同 関本榮次郎

○嶺つゝむ白雲紅く染めなし日は笑む如く出で

そめにけり 東京 松尾鶴子

○水音のきよくきこゆる大比叡の高嶺に今日も雲

のかゝれる 高岡 古谷孫右衛門

○紅のいろうつくしき夕やけのみねより嶺にかゝる雲かな 福岡 熊澤優子

○黒づめる池にうつれる嶺山に湧きづる雲のさ

ぐ今朝かな 松尾 清明

○追 加 選 者

ふくかせにはらはねながら松すきのしみたつみねにかかるしらくも

七月 山家夏月 課題

其の豪い豪くないと云ふことは其の最高本性の發揮の如何に依ることである。男子と雖も此の本性が暗く又攪亂て居つたなら白痴である。コンマ以下である。釋迦牟尼佛は男相の御身の儀に最大覺者として人類の指導者の地位に立てられたのは最高本性が極度に發揮されたのである。我天照大神が女相の御身の儀に最尊神として光耀あそばしたのは是亦最高本性の發揮である。絶対最勝の見地から見下すときは男女の相別の爲に優劣はない、此點に於て我大神は一大模範を示されて居るのであるから、我國では西洋流女子解放論の如きは飼の御馳走の前に雑魚の食美經の精神と何等一點の相違を見出しかねる。眞女之神が猿田彦をヘコマかした例の如き、降りては神功皇后の御行動の如き之れは女人の覺醒者としての御手本である。涅槃經に常住佛性を見る者は大丈夫の相とす、假令男子と雖も佛性を知らざる則は名付て女人とす、若女人ありとあるのは此間の消息を最も鮮明に説明されたものとして宜い。我國の固有の實際は實に法華經の精神と何等一點の相違を見出しかねる。眞に大乘の佛教、眞に神隨の靈國と云ふべきである。

機微譚語 山根青村

八六、賢母の愛育

八六、賢母の愛育

昔羅馬の名士グラカス兄弟の母コルネリヤは賢婦人なり、曾てハニバルの銳鋒を挫き羅馬を累卵の危きに救ひし名將スンビオに嫁す。スンビオ薨じて十二人の遺兒を抱ける寡婦となりしが、埃及王ドレミー遙かに其賢を聞き迎へて皇后となさんとせしも、コルネリヤは吳竹の直ぐなる節を守りて貧苦に安んじ、只管兒女の教育に全身を委ね、敢て富貴榮耀の爲めに心を動かさず。然るに天は飽まて此賢婦を試みんとてか、昨日は一男を奪ひ今日は一女を取り、その兒女殆んど死育しける。一日カムバニヤより一人の貴婦人訪ね來り、自ら持ち來れる寶玉を示

して頗りにコルネリヤに誇りし上、貴女も名家の夫人なり、定めし貴重の秘寶數々御所持あらん、何卒拜見させてよと迫る、コルネリヤは直ちに立ちて次の一間に遊び居たりし二人の男兒を伴ひ來り、彼の貴婦人の前に座らせさせて云ふ様、此二人の男兒は妾が金銀珠玉よりも貴重と思ふ我家の寶玉なり、能々御覽あらまほしと、案に相違の貴婦人は顏赦らめて大に慚愧せりとぞ。(逸話文庫)

後年史家ブルターケは特筆して「グラカス兄弟は名將の血統を受け天稟の才能他の羅馬の青年に優れたらんなど、彼等二人の完全なる人物となりしは主として母の教育の力にありと稱揚せり。果然二人は成長して頗る令名ありしも、不幸母に先づて共に國難に死し、コルネリヤが誇りの寶玉は果して瓦となりて全からずして終に玉となりて碎けたり。コ

○夕顔に呼び立てられて嬌かな
○夕顔や鞍擦瘡へて裸馬
○夕顔に文襄く窓の遊女戲
○夕顔を眺めて居るや墓
○夕顔や白粉臭き縁の先
○夕顔や蚊遣を透いて眞白く
○夕顔や之はようこそ從五位
▲捨鉢も夕顔咲いて見參す

大號課題「新涼」(秋季)。「走馬燈」

○再び「動く」に就て

天津散
惟泡
烟江獨淡
有田麗陽
琴友村山青王

其の豪い豪くないと云ふことは其の最高本性の發揮の如何に依ることである。男子と雖も此の本性が暗く又攪亂して居つたなら白痴である、コンマ以下である。釋迦牟尼佛は男相の御身の儘に最大覺者として人類の指導者の地位に立たれたのは最高本性が極度に發揮されたのである。我天照大神が女相の御身の儘に最尊神として光耀あそばしたのは是亦最高本性の發揮である。絶對最勝の見地から見下すときは男女の相別の爲に優劣はない、此點に於て我大神は一大模範を示されて居るのであるから、我國では西洋流女子解放論の如きは飼の御馳走の前に雑魚の食美を論じて之を要求するやうなものである。天の佃者としての御手本である。涅槃經に「常住佛性を見る者は大丈夫の相とす、假令男子と雖も佛性を知らざる則は名付て女人とす、若女人ありて自身に佛性ありと知るときは是れ男子とす」とあるのは此間の消息を最も鮮明に説明されたものとして宜い。我國の固有の實際は實に法華經の精神と何等一點の相違を見出しかねる。眞に大乘の佛教、眞に神隨の靈國と云ふべきであります。

由を知らない人である。機會あらば之を論じて見よう。

△妙法曼陀羅供養事に曰く「女人よりも男子の科はをよく、男子よりも尼のとがは重し、尼よりも僧の科はをよく、破戒の僧よりも持戒の法師の科は重し、持戒の僧よりも智者の科はをもかるべし。」

以上女子解放論を義母婦佐子の靈に供けまつる

○ 在大阪 山田秀太郎

此余糞所贈于武田元助雅君今以之似築城松尾研兄併乞正

吾感節儉力行莫妄聚財
又克散財由機宜

武田元助雅君是其人也

昔吾爲食客時知
財之集散適宜難

集散適宜厥身安
古今東西徵史顯
若反道心肝爲寒
戰後經濟人懷恐
自今經濟任尤重
浪華自古稱財府
君固富豪尙義勇
聞說投巨額金不吝
有時蹶起爲公奉

○水富める八萬石の青田哉 上總 関本鶯谷
○村々は青田に境なかりけり 千葉縣 堀江狸漢
○奉納の旗の眞白き青田哉 麻布 大塚曉花
○小便の青田に並ぶ生徒哉 青森 惟 泡
▲評 無邪なる様を見よ、言變似卑、言裡含容
○蛇走り水の瀆たる青田哉 菊鳴 天津哉
○青田や棹刺蛙立てゝあり 小石川 藤田類
▲評 棒刺とは或地方の農用に刺棒なるものあり此の意か、又刺蛙などの俗風あるか、
何れにしても枝木などに蛙を刺したる戯
ありて此句ありしなるべし。果して然らば句體句語も改むるの餘地あれども、此には句内面の意面白く感じければ兎に角
紹介し併せて投句者の教を待つ
○農會の札新らしき青田哉 千葉縣 藤本孤村
○肥の香の座敷抜け行く青田哉 小石川 かね女
○右く汽車の煙漂ふ青田哉 高岡 古谷雲峰
○片町青田に向ひ店へり 三河島 西澤明花
○今日て三日富士の攝野の青田哉 浅草 山根青村
▲只青田ばかり二番草の人歸る 王山堂
○夕顔や鞍なき馬の顔の先 東鳴 谷
○夕顔に去年の引越語りけり 菊田鐵蕉
○夕顔や鏡鑑据し縁の先 大阪 長尾直水
○夕顔に目鼻爪書く小供哉 明 花
○夕顔や鶏舎に餌撒く里子哉 峰
○夕顔や派出な浴衣の狩めり 雲
○夕顔や鼻緒の切れし庭の下駄 嘉 明
○夕顔や主人の笑を一人占め 花
▲評「主人の笑を一人占め」で主人のニコ／＼

である

伊藤輝子女史

○野口監督布教師の御活動

のこともわからぬから、雑誌代は毎月送付することにする」と言はれて、それ以来嚴重に毎月人々送金をされる。ソコデ帳簿係りは入金章を朱印で押すのであるから、福島さんの帳面に紺糸の鑑が出来ると無邪氣な事を言つて喜んでゐる。之が本當のありがたい讀者だと思つて同

人が寄合ふ度に難有がつてゐる。和歌はなか／＼巧いと見えてモウ二回以上天位に當選せられた事と思ふ。勝田翁は毎月その文字を拜見するが、之があ家流といふのであらう、當今我々の目について居る文字は半解風にウソに出来上つた文字を見ることが多い中に、勝田翁の文字に接する度に眞摯な氣分の現はれた文字だと文字そのものに對し深切なお爺さんに會つたやうな氣がする。此の翁も和歌はなか／＼玄人で、既に客月に天位にはいつて居られる。福島翁は之も同好人の笠見樂也翁の紹介で讀者となられ、勝田翁は皆様發句で御存じの山中慶山老人の紹介で讀者になられたのである。記者は此四人が正字に絡んだやうに見えて何とな好い心持で誌上でお附合ひして居る

「白蓮」の著者といへば凡そ新しい歌の好者で知らぬものもない人、之を筑紫の伊藤焯子夫人となす。白如な、紫香な、自然を基礎として歌ひ出さるゝ人生の機微、之が夫人の趣味である。かゝる新しくして美の憧憬に倘徉さるゝ夫人が我輩の雑誌、固苦しい雑誌『統一』の讀者であるといふことが何といふ面白い對照であらう、イヤ若い御婦人の佛いぢりツ！といふわけではない。こゝに生きた日蓮主義、法華經主義、清らかな日本の主義に共鳴をして居られるのである。最も新しき人は最も古き主義と邂逅をする縁繩があるかも知れぬ。然り、最も深い根柢ある古い思想から出た最も新しい思想でなくては味ひある香芬は放てない筈である。夫人を我讀者として居ることは又本誌の誇りである。

○監督布教師は、出海新興寺住職及び同寺總代等の出迎を受け、新興寺に御着、二十五日晝夜二回の布教に満堂の聽衆、甚大なる法益を蒙りぬ。
二十五日午後一時、新興寺にて
開會之辭
我國體と曰蓮主義(其一)
大平田天晴會講師に招請せられたる萩妙蓮寺守紀野俊
耀師は、二十五日久留米着、本泰寺信捷橋木氏を隨へ
新興寺に出演、野口監督布教師に隨行せらる。
二十五日晚八時、新興寺に於て日蓮主義講演會を公
開、
開會之辭
同情と堪忍
我國體と曰蓮主義(其二)
○四月二十六日午前十時、野口監督布教師一行は、波瀬を辞し、途次、矢部川驛にて中原妙經寺住職の出迎を受け柳川町へ向はせらる、柳川軌道終點に、吉見法

二十六日午後一時より妙經寺に於て
晝夜二回の講演會を開催す。
開會挨拶
不滅の大信念
如來壽量品要義
同日晚八時より同寺に於て
日蓮主義の女性觀
世界一及圓淨統一
閉會辭

出 海 山 主
記野俊耀師
野口監督布教師
教師一行は、渡
經寺住職の出迎
終點に、吉見法
ちに妙經寺着、

遠近より集ひ來りし者甚多、堂に満ち、未嘗有の大主教の祝詞を得たりとて隨喜謹聽したり。

開會之辭
聖經捧讀
聖語捧讀
針貝與三郎
大平田榮慶庫
天晴會幹事
大半田市民をして
其の意義を知らしめ、會場樂壇の興業を買收して、運
の聖業を敢てしたるは、教界の快挙といふべし。
二十七日午後一時三十分、大平田榮慶庫に於て緊急會
せり、大衆に向ひ、聖日蓮の教説は捧讀せられたり。
天晴會幹事

日蓮主義に就て	中原布教
建國の理想と日蓮主義(其一)	紀野教
思想問題と日蓮主義(其二)	野口監督布教
日蓮主義と社会主義	中原布教

同日、晚七時より同会場に於て
日蓮聖人の人格
建國の理想と日蓮主義(其二)
思想問題と日蓮主義(其二)
野口 横大僧正
出 級
海 教
教 翻

富田大平田觀學發行
書は八百、晩は千五百、二回の講演を聞きし大會會場
喝采交々至り場外に喧譟たり、或は讃歎、共鳴確かに響き、書は

大なる反響を押し、新たに日露主導を奉して疑して、國の者少からざる者を信じ解せず、帝國民の大使命あると見せしめし其理想を自覺せしもと、野口監督市教師が尊々乎として

き來り來り論じ去り世界思想の潮流に棹して我國民進むべき方針、取るべき態度を断じて中心統一大義に歸すべきを示し、眞文明の建設を訴へて拍手浴したる、實に其卓論高説、以て旗鼓黨々、日殖主

者なく諸聽せらるは、如何に現代の要求に適切なる
を與へられるかを證すべし。
日本監督布教師は五月一日日本泰寺住職、越代、信徒
名の見送にて午後〇時廿八分久留米發、鹿兒島へ
、思想講演會に臨まるべしといふ。
に本泰寺は寺領の和合漸く著しく墓地大整理、莊
の新闢、本堂修繕、庫裡修繕及増築あり、筑前信
延園手入喜捨等あり今後外布教發展に努力すべし
ふ。
月四日信徒野瀬末吉宅に家庭布教會を開き「本尊
義」に就て中原師の講話ありたり。
月九日本泰寺に於て皇太子殿下御成年式奉祝會を
し「國體の眞意義」に就て中原師の講演ありしと
。

● 檜徒の龜鑑

特
志

▲豊田伊吉、佐原伊平二氏の
特志

曾て吉見の増田卿から雑報の一部の中に名古屋の豊田氏から多額の寄附金のあつた事が報せられて居たが、斯る事は一雑報中の一片として掲ぐること

とは餘りにわざい事と思つてお蔵先打つて居たら、其後檜橋の松本堅晴師から委細の談も聞き、奇特の事と思つて居たが、今具體的の報告を得たるより左に掲載する、此事に就ては岡本潤正師の多大

なる盡力があつたさうである。(一記者)
遠江濱名湖畔、宗門の靈地吉見妙立寺檀徒たる、吉
田山口豊田伊吉翁は同地稀有の篤信家にして、菩提

私立寺の資産貧弱なる事を憂ひ、永代維持基金として本年一月金五千元を寄附せられたるに、今回更に宗徳英學布教資金として、教學財團へ金一千圓を即納されたるに、眞に護法事業の何たるを解し、在家外護の本分

統一圖報

を盡せる人と謂べし。又同翁の實弟佐原伊平氏も是又得がたき信仰家にして、妙立寺に於て毎年不易に執行の大法會資田として六俵入の田地を寄附し、加之該寺の朝夕勤經には、寒暑風雨を怠とせず、年中一日の如く毎日唱題する、其の他自行化他的善事德行枚舉に逸らす。斯の如く兄弟打拂ふて護法の信士ありとは聞くもよろこばしき話にして豈に權徒の趣能とも云ふべきならずや。

統一閣五月報

▼日曜學校 四日午前九時より十一時まで入校兒童百八十餘名。開校の辭若林不比等。訓話野澤少將。同校へ志納者左の如し。

一金貳圓 石波しげ殿
一金參圓 中澤平五郎殿
一金貳圓 藤澤智明殿
一金貳圓 十一日は妹尾、川島松雄講話。十八日は若林、妹尾講話、同日志納者。

日比野京子殿

西村靜吾殿

一金壹圓

二十五日は野澤、高木本順講話。

十七日同經。二十四日同經。

▼清明會 三日は那先經講了。十日は仁王經講始。

光三郎氏幹旋さる。

雅己宅にて、久保田、野澤少將、關田日城出演、中村

光三郎氏幹旋さる。

師なり。

▼信仰座談會 七日夜、出席十五名、野澤少將信仰の要義及び得意の要義を講話、其他討論あり。

▼青年會茶話會 十一日、出席者四十名、妹尾野澤感談。十四日同會、出席者二十餘名、關田、木村、高木師等も出席し、盛況。二十一日同會。

▼地明會(婦人會) 二十二日例會、本多大僧正講話。

●本鄉正道會例會 十三日夜加藤寅五郎宅に開く。小笠原丁、長谷川義一、木村日保出演、盛況。

●家宅講話 二十六日日本橋區川瀬町石町久保田高木師等も出席し、盛況。

▼京都監督布教 二十二日、書は妙祐久遠寺、夜は本山布教、前席川崎英照、主任講師は野口監督布教師なり。▼特記すべきは妙祐久遠寺にては今日監督

布教紀念として、例月八日常正修養會を開催することに決せり。爲に野口權大僧正特に新風文朗讀、慈代和

田辨之助、四方勝海、浮田德兵衛の諸氏其他婦人會員諸氏の盡力にて盛況。

▼京都監督布教 二十二日、書は妙祐久遠寺、夜は本山布教、前席川崎英照、主任講師は野口監督布教師なり。▼特記すべきは妙祐久遠寺にては今日監督

布教紀念として、例月八日常正修養會を開催することに決せり。爲に野口權大僧正特に新風文朗讀、慈代和

田辨之助、四方勝海、浮田德兵衛の諸氏其他婦人會員諸氏の盡力にて盛況。

▲申わけ▼ 本月は馬和尙から「現代人と禮儀作法」、證明君から「等置登山」といふ趣味のある紀行文が来る。其他の雜報が意外に多く、之を其儀掲載じたら六號活字にしても八頁に餘る計算となる。あれを之れをと色々工夫して見ても紙の不足、無い補は振ぬ道理で、結局、投稿者諸氏には失禮ながら略せるものは思ひ切つて、スッカリ切り縮めて掲載、其他の雜報や、論文や紀行文は次第に残念ながら廻ります。文部省に於ける各部監督の反響なら

▲川崎英照師の監督布教日誌は次號に掲ぐ

●四恩教林 六月五日夜淺草區水住町妙經寺に開く、加藤義準、長谷川義一、關田日城出席辯舌。

●天晴會 五月十七日統一閣に行ふ、聖德太子の御事蹟に就てを文學博士黒板説美。

●京都通信 五月の京都布教は本山妙滿寺を中心とし活動せり。一日、本山國壽會、講師三好信道、二日、本山護正會、講師萩原部長、八日、法王婦人會

(大慈院)銀井乾升、九日、正行婦人會(正行院)萩原、

店員十三歳より四五六歳迄の者五六名入用

御世話被下度候

四六版二百三十餘頁

定價金一圓五十錢

郵稅金十二錢

元朝倉改清水一乘

轉任 名古屋市中區古渡町靈山寺住職

三法堂 藤田總治

京都府三條通小橋西入

清 水 一 乘

財團記事其他次號

●播磨聯合春期大講演會 五月廿六日は和氣の本成寺にて開催す。開會の辭を原田日勇・吉永日洋、熊井本光、中川日史等講演後、國民思想の基調を能仁

事一述ぶ。廿七日は岡山本行寺にて開催す。開會の辭

を能仁事一。川崎英照、小笠原寂天、熊井本光等講演

後、寧ろ大古の民たれを原田日勇述ぶ。何れも大盛況、

宗利多大なりき。

●美作通信 五月、二と七日の津山の例會六回は

例の如く說教、講師能仁一十・七日、勝間町郡長の挨拶の後講演、講師中川日史・七日津山本蓮寺に釋尊降

誕會、前席能仁十一、講師中川日史・十八日、津山東

松原有志主催幻燈會、能仁説明す、以後毎月一回例行

●置名寄金 京都に於て近來感激せし一事は、某

氏匿名にて當地布教傳道基本金として、昨年二回に金

百圓、本年度は金壹千圓を寄附せられしことに。金

將來年々若干冠利益の一分を割て、淨業の一助とせら

るゝ由なるが、我利我欲の現代に於て、かゝる篤志者

現はる齋特の至りなり、是れ各師熱誠傳道の反響なら

ん。

●美作通信 五月、二と七日の津山の例會六回は

例の如く說教、講師能仁一十・七日、勝間町郡長の挨

拶の後講演、講師中川日史・七日津山本蓮寺に釋尊降

誕會、前席能仁十一、講師中川日史・十八日、津山東

松原有志主催幻燈會、能仁説明す、以後毎月一回例行

●播磨聯合春期大講演會 五月廿六日は和氣

の本成寺にて開催す。開會の辭を原田日勇・吉永日洋、

熊井本光、中川日史等講演後、國民思想の基調を能仁

事一述ぶ。廿七日は岡山本行寺にて開催す。開會の辭

を能仁事一。川崎英照、小笠原寂天、熊井本光等講演

後、寧ろ大古の民たれを原田日勇述ぶ。何れも大盛況、

宗利多大なりき。

●播磨聯合春期大講演會 五月廿六日は和氣

の本成寺にて開催す。開會の辭を原田日勇・吉永日洋、

熊井本光、中川日史等講演後、國民思想の基調を能仁

事一述ぶ。廿七日は岡山本行寺にて開催す。開

